



岐嶺蘇林

目次

- ▲講演 福島大將閣下
- ▲研究 木曾谷に於ける野火に就て 製炭法の研究
- ▲通信 學校便り、寄宿舎便り、擊艇部便り 稽程一千日
- ▲詞藻 文章、和歌
- ▲雜報 會員消息

大正三年十二月二十五日 第六拾二號 (每星期一刊) (明治四十二年七月十日) (第三種郵便物認可)

雄圖廣

福島大將閣下講演

本講演は去る十二月一日單騎旅行の途を以て通過せられし福島大將閣下が福島小學校に於て特に本校生徒に向つて講演せられしことの大意を記述せしものなり第六回卒業生岡戸郁二君特にこの稿を寄せられたれば茲に載せたるなり

因に題號「雄圖廣」は當日大將が特に本校の爲に揮毫せられし三大文字也 取りて以て本講演の題號とす僅々三文字而も大將の我林業界に囑せらるゝの深きを知るべし (編輯員附言)

予は今回の旅行の途を以てこの地に入ると同時に、山林學校の設置あるを知りて衷心愉快を感じるものなり。諸子の學校の前途や實に遼遠なりと謂つべきは諸子も予と同感なるべし。今この四圍の森林を見るに鬱蒼たるものなりと雖も此儘永く放置すべきにあらす、毎年適當なる箇所を伐採利用し直ちに其跡地に植栽せらるゝものならん斯くして林業は無限に繼續せらるゝは管にこの地のみならず、到る處に散在するものなれば諸子は益々其の抱負を大にし、忠實に其道に勉學し他日多望なる將來に向つて其の眞技を發揮せられん事は余が切望に堪へざる所なり。されば今予が知れる所の林業の一部を談じて參考となさんとす

講演

余の嘗て在りし關東州は面積二一八方里本邦に例を取らば奈良縣、鳥取縣或は富山縣に相當するは彼の地に行かれし諸子の知らるゝ所ならん。彼の地の日本領土となるや其の大部は禿山なりしが故に當局者は明治三十九年以來植林に意を注ぎ本邦より松の苗木及種子を取りて造林せしに依り現今に於ては稍青き山を見るを得るなり。さは云へ最初には實に小規模なる計畫を以て本邦より前述の如く苗木種子を取り寄せ實行せんとせしも其の禿山の全面積即ち十町歩を青山となすには約八十六年の長日子を要するが故に現今の時勢より考究して斯の如き遅々たる事業にては到底満足なし能はざるが故に今後十年間に於て全部植林をなす可き計畫を立て已に着手せり。其れに要する苗木は六億萬本、即ち一ヶ年六千萬本を植栽すと云ふ計畫なり。其の造林地の地況は岩石地或は砂地にして成長の速かなるアカシヤ、ポプラ等の生着容易なる樹種も適せざるに依り其の植栽には松を以て選定し其苗木を養成せんとせり。然れども之に要する苗木を養成せんには實に大面積を要すべきにより到底一二ヶ處に於ては一年間に六千萬本の苗木を養成し完全なる良苗を仕立つる事困難にして且つ其の造林地は實に廣大なるものなれば運搬其の他不便尠からず故に三十ヶ處に苗圃を設置し一ヶ處の苗圃に於て毎年二百萬本即ち三十ヶ處に

於て一年に要する六千萬本の苗木を養成す
と云ふ状況なり、而して其の植栽樹は二十
年の年齢に達し一本一圓宛の價值あるに到
らば六億萬圓の價格を生ずるなり。今日本
を世界大陸に比すれば、實に小なるものな
るが其の日本の一部分に相當する關東州は
地圖上に色別するも八目に入らざる如き處
にして今後十ヶ年計畫の如き植樹が二十年
に至らば前述の如く莫大の金を得るなり。
尙又其の地が如何に林業の發展策に汲々た
るや論ずるに要なく明かなり。諸子は斯
の如き地の尙他に何程あるかを知らざるべ
し。諸子は修學旅行にて各地を跋渉して株
業及び其他を視察見學せしならんも事情の
許す限り休暇等を利用して海を渡るべし。
余の故郷は松本市なり。明治初年の頃は東
上するに一週間以上を要したりしが交通機
關の發達と共に一日を要せず、今や四日を
得ば京城に五日を以て北京に達するを得る
世の中なり。庶くは諸子も以上述べたる事
を記し多望なる將來に向つて無限にして最
も趣味ある林業界に身を獻げ以て世界を相
手となし一意専心勉強せられん事を。
一言述べて余の希望となす次第なり。

木曾谷に於ける野火に就て

木曾谷に於ける林野火入の沿革は之を詳か
編纂に係る本會考續貂中に
野火巢鷹申渡の儀例年早春之内御關所番
三人申付足輕一人宛召連上下宿並に近郷
に相廻惣百姓連印之書付
二村中前山燒之儀春山中々に雪御座候節風
無之日を見合庄屋組頭吟味仕村中不發召
連罷出燒可申候燒留不申内は皆々其場所
に附添罷在外移不申候様に致し燒可申候
農所に草山御座候共右之通可仕候事
とあり。由來本部の森林保護制度は頗る嚴
重にして野火に就ても相當の取締法を以て
久しき以前より行はれたるは争ふべからざ
る事實なり。古來本部の特有物産として有
名なる木曾馬の飼料は全部此の野火の跡に
繁生せる野草にして。第一馬の飼料としそ
れより厩肥を得るを以て農家經濟上緊要欠
くべからざるものなり然るに明治三十二年
四月長野縣令第二十五號を以て林野火入及
焚火取締規則を發布せられ續て明治三十五
年四月告諭第三號を以て「從來の習慣に
殊に草地に火入を爲すもの、如きは爾今
斷然廢止し且山野所在町村は一般野火消防
の備を立て互に相戒め其の豫防に力を盡し
野火の災害を除去するに努むべく」云々と
論達せられたり。當時これを不利不便とす
るの聲勢少ならざりしかども爾來火入は全
く廢止の不止得に立ち至り漸次野草は減少
し遂に從來馬の五頭を畜養せしものは三頭

に三頭畜養せしものは二頭若しくは一頭に
減じ爲に厩肥を得る事少なく田畑の肥料に
欠乏を來し馬匹の減少は延ひて勞力に影響
し農家經濟上非常の打撃を見るに至れり而
して連年火入を爲さざりし結果荆棘繁茂し
諸種の害虫發生し被害少からざりし其の後
森林法の改正せらるゝあり明治四十四年八
月長野縣令第二十三號を以て森林原野山岳
又荒蕪地火入及焚火取締規則發布せられた
れば本春は久し振りに害虫驅除の目的を以
て行火の出願を爲し場所に依りては九ヶ年
乃至十ヶ年目にして漸く火入を爲し得たれ
ば農民の歡喜一方ならず火入の方法は風な
き平穩の日に於て關係部落民各戸一名づつ
出場して監督者指揮の下に先づ山頂より防
火線を作りて燒き始め次第に下方に及び其
後より危険豫防の監視を爲し更に老朽木の
煙りつゝあるをば適宜消火し警戒實に嚴重
を極めたり。これ本部には特に御料林守護
規約に存するあり一層深く留意せし状況な
りし地方農家の唱ふる利害關係調査の必要
を感し行火の際試験地を選定し置き去る九
月廿一日双方三坪づつ坪刈を爲し比較調査
を爲したり。當時木曾山林學校校長安藤時雄
氏西筑摩郡書記丸山直樹氏信濃毎日新聞記
者宮林釜村氏區長田嶋兼吉氏區長代理田沼
佐太郎氏立會ひたり當日は草刈山入りの日
なりしかば該土地關係者五十九戸の男女凡
ろ六十餘名と共に調査したるに其の結果左

の如し

一、試験地 木曾福嶋宇伊谷湯の澤
一、土地所有 福嶋區有
一、行火面積 原野十五町歩
一、行火月日 大正三年五月十三日
一、刈取月日 大正三年九月廿一日
一、一字湯の澤の内萱野
種別 行火地 一坪 不行火地 一坪
地勢 東南傾斜五度 東南傾斜 五度
地質 洪積層 洪積層
土壤 腐蝕土 腐蝕土
乾濕 乾 乾
草の種類 苜安 苜安 蕨
生草量 五百七十三匁 三百八十匁
生草長 百七十匁 八十五匁
生草色 肥て青黄色 瘦せて青色
發生疎密 密 疎
但不行火地は九ヶ年間火入を爲さざりし
爲小楢六尺以上に繁茂し漸く坪刈を爲し
得たり
二字湯の澤の内與治刈場
種別 行火地 一坪 不行火地 一坪
地勢 西北十五度 西北五度
地質 洪積層 洪積層
土壤 腐蝕土 腐蝕土
乾濕 濕 濕
草の種類 苜安最も多し 苜安、デンダ、
蕨、白樺、榛、小田卷、萩、猿

木少しく混す

豆、カンザ草、
蕨、榛木、白樺
生草長 二尺七寸 野菊、嫁菜
生草量 五百七十匁 二百二寸
生草色 肥て黒青色 弱く黄味を帯ぶ
發生疎密 密 密
三字湯の澤の内萱野
火入を爲したる場所にして最も好
く繁茂せるもの
地勢 東南廿五度
地質 洪積層
土壤 腐蝕土
乾濕 乾 乾
草の種類 刈安
生草長 六尺
生草量 一貫三百匁
生草量 四百八十匁
生草色 肥て黒青色
發生疎密 密 密
以上の如き成績にして火入を爲したる方は
森林の害虫を驅除し益なき雜草を燒却して
肥大せる苜安のみ多量に收穫する事を得た
り。試験第一表の比較に依れば一坪に對し
乾草量八十五匁の増収あり之を福嶋町地籍
内本年火入を爲したる總反別百八十町九反
二畝歩に對すれば四千六百十五貫四百六十
匁の利益にして又本年部内木祖、新開、三
岳、王瀧、駒ヶ根、福島の六ヶ町村火入總

製炭法の研究 (一)

北村 正夫

大正三年も最早僅かに數日を殘すと云ふ此
氣忙い年末號に面白くもない眞黒談義を記
するは餘りに心なき業とは思ふたが本年は
僕が製炭法の研究を始めてから(明治三十
八年)丁度十年目に當り且つ三年前から實
験に着手した新案の製炭法も幸に本年の秋
季實習中の實驗に依つて略々理想に近い成
績を擧ぐることを得た誠に紀念すべき年であ
る。而して此幸福なる本年を迎ふことを得
たのは僕に今日の境遇を與へられた本縣と
其實験をなすに就て多大の援助を與へられ
た校友諸君の御陰である。僕は丁度十年目
に於て兎も角も理想に近い製炭法を完成し
得たことを喜ぶと共に長野縣並に校友諸君

反別六百七十四町一反九畝二十一歩に對す
れば實に十七萬九千九百二十貫二百三十五匁
の利益と爲る筈にして行政方針と實地とは
全く反對の結果を見たり。草刈の爲來集せ
る農家の婦女子等は唱へて曰く「今歲は馬
が飼へる『今歲は馬が肥へる』と實に非常
なる欣喜の状態なりし老農の言辭に年々火
入を續行せば秣として草は益々良好となり
數年の後には試験第三表の如き收穫あるべ
しとの事なり。
此の調査は只本年一回のみなれば尙今後兩
三回繼續して研究を爲さんとす。(了)

に向つて深く感謝する處である。然るに折好く去る十一月十五日更級郡稻荷山町に於て本縣の山林會第十四回總會が開かれた。山林會では數年前から製炭改良を企てられ、山林會の事業としては最も力を入れて居る所である。幸に僕も此總會に招かれて講演者の一人に加はるの光榮に浴したので、稱して其一端を發表することにした。之れは長野縣に對する義理の一部は果したが、次には我校友諸君に對しても此の紀念すべき本年中に於て少くも其一端を發表する義務が有る様に考へられたので、讀者諸君の御迷惑を顧みず此の、年末號を發端として炭燒談義を連載することにした次第である。

其 一 製炭法研究の發端

校友諸君は元來遺忘性であるが而も十一年前の炭燒の失敗は今日迄も否此後とも忘るゝことは出来ないのである。それは僕が愛知縣立農林學校に在職した頃、僕が先輩の後藤末吉君と云ふが林科の主任であつた。其後藤氏が林産物製造の實習をなさしむるために白炭竈と黒炭竈を築造する計劃を立てられ、これを三十七年度の豫算に計上した。處縣費で築造することに決定した。

穩無事に行ぐものでない、後藤氏は突然職員令を受け三十七年の四月頃日露戰役出征の途に上られて僕は其後を引き受けねばならぬことになつた。校友諸君は申譯けをするのではないが實際林産物製造學は今日に於ても餘り重視せられて居ないのである。兎も十一一年の昔し、しかも世人の最も卑賤として顧るもの、少ない炭燒に對しては林學者として其智識を有することを却て恥に思つた位である。こゝに云ふ時代に學んだ僕の炭燒に關する智識は全く〇であつた。一寸話しの様であるが實際白炭と黒炭の區別さへ充分に判らぬ位、無論土竈石竈の區別の如きは云はずもがな炭竈なるもの、實物を見たことさへなかつたのである。

がよい知らないことをごまかすは不徳である。云が此の際僕の立場としては餘義なく此の不徳を敢てせねばならなかつた。僕は此日歸宅しても食事をする勇氣さへなかつた。只忙然と机に向て居た所へ折好く新炭商の某と云ふが來たので炭竈のことを聞くと、八名郡は(三河國)炭の産地であるから其地より炭燒に經驗のあるものを庸ひ來る様によれば宜しからんと注意せられたので、技手先生とも相談の上八名郡から炭燒を連れて來て築造することにした。

二月に大分縣立農林學校に轉任することになつた處が幸か不幸か僕は林産物製造學を擔任することになつたので、轉任早々愛知の失敗を繰返しては大變と茲に愈々製炭法の研究をなし三十八年の秋季から炭燒夫に就て實地の作業を見學し三十九年には實習地の一部に土竈と石竈を造りて實地の研究をやることになつた(未完)

通信

學校便り

○津崎學務課長來校 十一月二十一日津崎學務課長來校一通り視察せられし後小學校に於て一場の講演を試みられ本校職員生徒一同も聽講せり。

○福島大將通過 十一月卅日敷原泊りの同大將は十二月一日午前十一時福嶋に入らるる豫定なるを以て我職員生徒は將軍を迎ふべく一般歡迎者と共に福嶋町外れ釜ヶ坂まで出張せり同時に至るや將軍は名馬寶弓に跨り、精鋭に無限の威容を湛へつゝ馬蹄肅々一同の敬禮を受けて、舉手の儘福嶋町に入り直ちに岩屋本店に休憩晝食を取られし後小學校に於て小學校生徒一般町民、及在郷軍人山林學校生徒の爲三度場を更へて演壇に立たれ夫々教訓を與へられたるが就中我山林學校生徒の爲に講せられしもの最も

長く且つ力ありし様覺えたり其大要は岡戸君の筆記に見れば又贅せず夫より將軍は小學校、岩屋にて有志者の需に應つて十數葉の揮毫をなせり本校の爲にも雄圖廣の三大字を書かれ好箇の記念を残されたり、かくて午後三時半頃將軍は福嶋を辭されたるが一同は八澤町外れにて將軍の後影の見ゆる迄見送りて解散せり。

○安藤林務課長來校 十二月四日午後安藤前校長來校一時半より講堂に於て一場の談話を試みられたり何にせよ先生が轉任後に於ける初めての會合とて思ひ出は縷々盡させず運動會の盛況、青嶋の陥落より縣會に於ける本校國支問題の提案さては西澤、福山兩先生の任命、用水の問題等にまで及び本校の將來を祝福し一層の奮勵を促されたるが子弟を思ふの至誠溢れて懐しかりき因に先生は翌五日御家族を引纏め長野に歸られたり。

○安藤前校長寫真掲揚 松田及江畑兩校長の肖像は昨年落成式後を以て校長室に掲揚せらるゝ事となり其節今後歴代の校長肖像は永く記念として保存しては如何との議もありしが這回安藤校長轉任に付顧問相談の上校友會豫備費より右寫真代として金五圓を支出することとし此程出來校長室に掲揚することとせり因に額縁は安藤先生の寄贈にかゝる。

寄宿舎より申上候

すゐらん

氣温は日に／＼マイナスにて、杭ノ原の大伽藍もはためく北風に颯られて朝夕手足をしがめ居り候、風の音窓に舍庭に蕭殺の氣を充たし舍の面目は悉く寒居冬籠の仕度に入り候、寒威の征服者は何のその冷水にても引かぶらむものを口惜しや左様の猛者は差當り見受け申さず候、何人も駒ヶ嶽のプラチナ色彩を眺めては頸を縮め申す次第、火鉢公の大持ては亦格別にて候よ、校長先生は代られ舎監先生も代られ暫く缺員中なりしも、福山先生の御赴任後は大に舍も活氣を添へ候、同先生が軍人精神を以て萬事實踐躬行主義に則られ嚴肅に且精細に我ら舍生の上を監せらるゝあれば舍風の興起も愈々これより顯著なるべきかと存候、萬事萬端設備の完成するにつれ益々空乏を感ずるは毎度乍ら用水問題にて候「杭の原の生徒さんは顔を洗はぬ」とか「馬の垂れ流し水を呑んでる」との様々に雜言を浴せらるゝも世が世なればなご、時に愚痴の一つも溢し申候之とも昨今應急工事の爲賄用水丈は都合つきかつ／＼暮し居り候、兎角人間は辛抱が肝要ぢやゲなといふ諦を疑らし花さく來春の大々的工事を心ひろかに神かけて期待致し居り候、六月以來恒例となりし月未舎生懇親會も月を重ね

て盛況を致し、回は一回と興趣を増進せしめ来る忘年会にはウンと底板的に各自の腹底迄さらげ出して興せんものをと期し居り候圖書室も面目を改め蔵書は五百に垂んとし娛樂室も中々にさかり申候、復活後の購買部も日用品丈の小間物店なれど優に週を通つて八圓内外の賣上有之、ケーク購買に到りては流石に甘黨我口可愛がり主義の瀾漫せらるや日々二圓の坂を踏む候、浮世の不景氣風を外にして和平に酔ふとは、親機の煙の味もほごに頂戴仕り今更に有難さを身にしみんと感得いたし候。タイムはマチイの金言兼てより聞き及び候ひしが今度伊勢原商店より新築記念として寄贈され候大時計は玄關先の大妻見と相對して飾りつけられ、長二尺にも及ばんずる大分銅をブラリと振りつゝ長針はソリソリと歩みを起し舍中時辰界の覇者然とすまじ込み候、殊に午の時鐘は舍の隅々までも響きわたらん許りにて候、夜晝二十四回のガン／＼中、正午の呻りは最も耳障りよろしと一般の輿論にて候理由は申すまじく諸兄の御推察に任せ申候……

も遠からず積雪も近きものと存候、駒の銀臺をなすも旬日を出でトと思ひやられ候か、く多事なりし大正三年も暮れなむしつら／＼往を顧みて來をばれば轉光陰の流水的なるを歎せずんば非ず候、杯を擧げて新春を迎ふべき身にしてこの悔百出いたし候、されど達觀せば(？)さにも非ず「今更に何を嘆かん神武より二千年來暮れて行く年」にて候よ、年の瀬なれば流石に往も偲ばれ候へどもかく觀じては何の苦も無之候
寅年なれば一氣呵成に進みし次第、又來ん兔の年には月に浮かれぬやう、龜に退けをさらぬ様、努力いたすべく候、天井裏の鼠公も休暇中の横行濶歩を期しつゝ今頻りに參謀規畫中の由にて候、何として一ヶ月に近き留守中もあるべしと存候
これにて本年の寄宿舍通信も擧筆仕候
(十二月七日南寮第七室にて)
もとよりの世なれば借るもよし
夢の世なれば寐るも亦よし

擊劍部記事

十一月十六日日本縣師範學校教生縣下小學校視察旅行の途次本校に立寄られ擊劍仕合申込みあり依て本部は之れに對戦せり
勝負左の如し
審判松原教士、(三本勝負)

- (相谷)君(師) ○(柳澤)君(本) ○(劉)君(師) ○(海谷)君(師) ○(長)君(本) ○(種)君(本) ○(松)君(本) ○(林)君(師) ○(川)君(本)
- (藏)尾君 ○(富)士川君 ○(森)本君 ○(鈴木)君 ○(宮)島君 ○(丹)澤君 ○(武)居君 ○(白)木君 ○(皆)川君 ○(井)深君 ○(宮)島君 ○(小)田君 ○(古)川君 ○(會)我君 ○(藏)田君 ○(岡)田君 ○(清)水君 ○(久)保田君 ○(岩)田君 ○(各)務君 ○(上)島君
- 三人拔 藏田君
- (山)崎君 ○(新)井君 ○(丸)山君 ○(奥)村君 ○(丸)嘉君 ○(下)平君 ○(鳴)澤君 ○(千)田君 ○(宮)川君 ○(坂)本君 ○(開)運君 ○(佐)木君 ○(小)池君
- 三人拔 奥村(和)君
- (三)本勝負
- (鳴)澤君 ○(飯)沼君 ○(平)田君 ○(實)君 ○(萩)原君 ○(等)々力君 ○(官)君 ○(坂)本君 ○(加)藤君 ○(朝)君 ○(水)上君 ○(坂)本君

右仕合終りて松原教士三四の模範稽古を示し午後四時半無事閉會せり
我部は曩に報導せし如く奈良農林に對戦し今亦本縣師範に應戦する等の對外試合に太刀風を振はせて部員の意氣頓に昂り平常の稽古も亦盛況を呈するに至り、本部の進運實に目覺しきは同人の慶賀する處也
(以上 擊劍部報告)

謹告

時下嚴寒の候に相入り寒威凜烈に御座候處本部は例年の如く心身鍛練の目的を以てこの好季節を逸せず左記の期限内本校講堂に於て擊劍稽古相催すべく候間部員は勿論會員諸君の奮つて御參會御練習あらむ事を今より切望仕候
一、日限 大正四年一月二十二日より
同年二月十一日迄
一、稽古時間 毎朝午前四時より同六時迄

十二月日 校友會擊劍部 會員各位

雜記帳より

- の字を十字讀み込める歌
▲武藏野の 笹の小笹の露の上の
夕の月の影ののうき
▲古の事ののこれる みよしの
吉野の奥の、かけろふの小野
○人を馬鹿にしたる氣分の歌
▲世の中は皆風鈴と思ふべし
金がなくては、ならぬ身の上
○五色の歌
▲また青い素人淨瑠璃黒めんと
赤き顔して 黄なる聲出す
○金蘭齋が辭世に
▲東山の花見しも此春を限りか、西山の月
見るも此秋を限りか、さても死にともない
事ぢや、――

誓程一千日 (一〇)

在佛都會生
○來年は來年はと暮れにけり……
若し夫れ之れを春秋の筆法を以てするならば、満目の風光轉た寂寥、乾坤愈々悽然たり、玉屑霏々皚々として滿眸皓然、懸て一

陣の東風暮然として來れば春光融々四面悠新なり……とでも云ふ所ならんが會山式の書き振りにては、年に一度の瘡痍を報じ紋切り形の詫び合をする時が迫つたと云ふ譯モーギャーと言ひ始めてから三十一年目母校より活社會てふ世の中へ抛り出されてより既に十二年目、迫つてはこぼす會山子の暮し、エー面倒だ二三十年一所に來い
○北村先生 先日稻荷山町に開催の信濃山林會での御講演洵に嬉しく全く敬服しました、アノ抱負！アノ氣慨！私は確に出色で存じます……若し夫れウエブスターの辯論的大演説に至つては彼等の社會を通じて知らしめたるなら必ず先生の銅像を建てると云ひ出すでせう阿々……私共は凡そ學校に教鞭を執られるからには大學教授でなくても或る一科の學術又は應用に就ては以て一世に師表たるだけの自信あつて欲しいと常に思つて居ります茲を以て今度の先生の快氣焰を拜聴して我々は學校の爲め大なる誇りとし我々の名譽と致します、私は外の先生にも折に觸れ進んで虹の如き氣を吐いて戴き度いと思ひます、ソシテ今茲に同會聽集と母校の兄弟とを代表して先生に深厚なる感謝の意を表します尙併せて先生の御健康を祈ります。
○嗚呼社會！文學は簡單であるが中々六ツかしいもの……と云ふ事は寄る年波と共に痛切に感づて來ます、學校から社會へ出た

時總てを異様に感ト妻を迎へて一ト感じ子
供を儲けて又一ト感じ親に別れ血族を喪い
て不幸なる境涯に立至ると誠に色々感じ
ます。一が私の今の社會観は一家四口に糊
すべく官界に於ける夫れでありませ私共が
上官の異動毎に來る思想上の變轉は甚だ大
なるもので是等の一變動毎に同僚の何れも
が氣分の上に甚しく異變を來す様に思はれ
ます。ソシテ夫れは官界の常道と云はれませ
茲を以て若し上官に欠員あり代理あり他上
官の兼務ある場合に於ては私共の歸向する
處は確一せずして沖に迷ひます。況んや鈍栗
の背較への褒貶詐術の行はるゝに於てをや
此間に處して所信を斷行するは南朝の忠臣
が孤城に健闘を續けた位の困難が有りませ
併し私は滿七ヶ年の官界生活を續け順逆悲
喜を通じて自分丈は斯くあり度いと思ふ
信條は節義の二字であります。ソシテ憊考
へませ、上長官の命は水火の苦を嘗め盡し
ても進行するの覺悟と勇氣とは實に勇らじ
く望まじしが、同僚才互(同ト判任官中の
上下も茲に才互の内)の間に於て些々たる
利益の爲めに盲従したり主張を抛擲するは
餘り外見の立派なものでない何となく男々
しい處が無い私はせめて蘇門に森靈の加護
を受けて研鑽を積んだ我々丈は高潔若く
は高節の名を失ひ度く無いと思ふ私共の身
の上には順逆糾繩頻々交々到るは覺悟の上
であります。私は其人の眞價は逆境の時に最

も能く現はれると思ひませ、私はソヨデ逆
境の時は全く總てを黙忍し去る如きは實に
勇氣ある快男子の態度として尊敬します、
闘志無き者は生存の價値なし。一とは哲學
者オイクンの云つた處で闘志必ずしも罪惡
でないと思ふ、ソシテ所謂官界の奥の手と
心得て見へ透いた順慶式處世法を執られる
僚友には如何に高等の教育を受けて居つて
も又如何に識才優れて居つても其人に對す
る隣人の敬意には濃厚の差が出来る。私は
信トませ苦節五十年少數黨を率いて日比谷
野頭に異彩を放てる木堂先生は此點に於て
私は尊敬を拂ふ一人であります。之れが
私の今の社會観の一つで亦官界七ヶ年の感
想の一部であります。
◎長野縣の林業行政も着々緒光を認むる様
に成りました之れは誠に喜ばしい次第で有
ります、縣の林業諸費が近來削減に削減を
加へられた私は一層皆んな削除しては……
と云つた事も有りませ、由來堤防の暴水
に抗するや其の最も弱き部分が先づ欠壞す
る事實は目撃して居るが之れは又政治上に
も豫算の削減上にも同一微である。屢聞き
ました私が私は豫算の削減丈には確に水の
物理的性質が實現する事を信じませ
長野縣は林制上に於て天下最重の任務を帯
びて居る山岳國の水源國であります、故に
農商務省でも本縣を特に重視して居られる
さうであります、治水上本縣の施設と云へ

思出の記

石 公

は或る程度迄は特別なる眷顧を得られると
も聞いて居る、茲で公有林野整理費二千百
圓が無瑕で縣會を通過したのは寧ろ當然で
あります、私は安藤新課長の榮轉が今二ヶ
月早ければ……と遺憾に思ひませ、併し今
の林務課員の思想上には近頃一變化を來し
たのは事實で之れから林政上にボツ／＼光
輝ある花を咲かせる原因で私共は來る可き
希望に満ちたる新春を迎ふる爲めに大白を
擧げる積りで居ります
茲に敬愛なる諸先生並に蘇友諸君の健全な
る迎年を祈ります
小生へ瀧の書はがき御惠送の時は御住所
御明記下さい御禮の都合も有りますから
十二月七日夜



秋冬漫語

三年翠 邨

流のノールと其に蓋し籠の籠

▲一片の梧葉階下に音して天下の秋を知る
秋はしかく卒然として、天外より來り而し
て吾人の聽視を驚愕せしむるものなりや、
非ず！狂熱の中夏新涼の季夏を送り而して
雅移駭々、秋思天地に入る也
▲無爲の閑子は枯葉の潤聲に愕きて讒言し
有爲の丈夫は超脱の空際を望みて、ろろろ
哲人傑士の姿を偲び、毅然として醒む、蓋
し俊庸の岐する、處りの眠孔の大小に始ま
る矣
▲果して然らば秋氣六合に充つるは、萬象
の覺醒を促し、自然の超脱を宣するものな
らん
▲秋既に深きや、滿目悉く赫焉、その眞紅
に飽きて透徹の水を望む、水既に瘠せて石
出で、蕭條の狀先づ水邊に來る
▲願れば曩の錦繡を掛けし巖溪悉くこれ枯

瘦、山骨の稜々たるを見る、蕭條の巖山に
も亦來れる乎
▲四顧寥廓なれども、空猶清明澄徹、時に
明輝を擧ぐる秋月を掛け、斷雲を徂來せし
む、氣宇高くして且清し
▲彼の天邊一痕の月に對して、誰かもの純
潔神聖を思はざる、誰かもの神知靈覺を味
はざる、觀者當にその美を賞するのみなら
ず、自ら反して心情の潔齋と、靈覺の受得
とを得るあらば可也
▲唧々たる音草間に細り、野に花萎靡し
山に綠葉なし、滿目の薄白穂を傾け、鳥聲
漸く酸、晩秋の寂寥、語りつくして餘蘊な
し
▲此時、獨り東籬の下に傲然たるもの、隱
逸の君子、菊あるに非ずや、一滿庭これ草屍
葉骸の累々たるに、獨り慘たる秋風に對す
孤軍異域に奮闘の概なくんば非ず
▲秋漸く老いたり、窓下日毎の結霜、皓々
として又幡々、亂樹の疎影地に淡き時、冬
威最も凜然、霜氣刃を翳して人に逼るを覺
ゆ、世は既に秋に非ずして冬也
▲霜滿軍營秋氣清と、懸軍茲に千里なる英
雄の心緒に觸れて神秘の琴線鳴り、遮莫家

新潟まで

三年種 倉 生

郷懷遠征と征戰歳余なる武將の情感に訴へ
て、崇美の念と望郷の歸趣を催さしむるも
の天地の冥契にあらずして、何ぞや
▲秋冬の交はるれ收むべきの時也、人生こ
の時りゆる悠々たる行路に向てその歸趣を
思ふ、亦宜なり、故なきに非ざる也
▲晶瑩玲瓏の空、漸く灰白の瀾漫するあり
て、陰翳地に落つる時、風死し空氣鏗然と
凝り、玉屑の繽紛たるや既に近きを知る、
夜半戸を排せば寒月水の如くして、山頂を
過ぎる胡風の濤聲の如きを聽く
▲秋逝き、冬來ること、天地萬古に亘りて
同トきのみ、唯この間に處して吾人、漫語
し讒言を縷す、吾人も亦うれ閑子乎。
(十二月六日夜稿)

旅日記より

七月廿五日——長野驛にて乗り換へたる
列車は昨夜午後十一時五十分發して越後
へと志しぬ、暗中を縫ふて名も知らぬ小驛
幾つかを過ぎぬ、車中駁軍の攻撃手痛くし
て輾轉反側すること三時間……今朝午前
三時直江津驛に下車し少時休息此處にてA

君に別る、君は此地より汽船にて歸郷する也同三時三十分發新瀉行列車に搭す列車の進むにつれ東天は次第に紅潮し海水浴場として名を得たる鯨波を過ぐる頃は全く明けはなれ日光暗く曉風冷かなりき東光寺驛附近に到れば沃野連り點綴せる杉檜の平地林を見るはんのきを以て畦道に境界線とせるは稲架に兼用するものならん弓手に宏壯なる長岡工業學校を眺めつゝ午前六時十分長岡驛に着同二十分發にて加茂驛を過ぐれば馬手に吾らの同攻の友たる加茂農林學校を望む、同車中の一客余に向ひ「同校は新潟縣立諸學校中總ての點に於て模範學校なり」とは植生田八代田兩驛間には杉の平地美林を見たり石油の産地として當縣にては柏崎と共にその名を得し新津も過ぎ之れより龜田驛間は梨沼垂橋附近は桃の栽培頗る盛なるが如し午前八時新瀉驛に着し下車して鮫崎長蛇の如き沼垂橋を渡り新瀉市に入る沼垂橋は其の長十數町之れに要したる巨額の經費等聞きしかど數を今に記せず唯だ此設の主任たりし某博士は其設計に苦辛したりしが原因となり落成後日ならずして不歸の客となりしとの事を忘れず以てその設計の如何に困難なりしを察するに余りあ

り夫より宿舎につき朝食を喫せし后かの有名なる白山公園を見物す歌に曰く「新瀉戀しや白山様の松が見えますはのく」と實に然り松の奇形なるもの吹き寄する日本海の潮風に嘯きて立ち此處に幾百年ぞや五港の一とたへられし新瀉の人士を見下すべく以て愛すべし豪壯の氣技幹に充てるを覺ゆ園内に白山神社あり信濃大河に臨み眺望絶佳なり約一時間にして此處を辭し附近なる物産陳列館を縦覽す林業に關するものは竹細工スキヤ象嵌細工の三種あるのみなりき午後は醫學專門學校師範學校を視察せんとせしも時恰も夏季休暇なりしかば外観のみにて充分果さざりしは遺憾なりき師範學校は其の規模全國中等學校第一を占むと稱せらる、こゝに於てか海岸に到り海水浴を試むる、當日は恰も土用丑の日とて青年は勿論老幼男女に至る迄海邊に集り爲めにかの曠大な新瀉の濱は人を以て埋められたり渺々たる日本海の浪は鞆鞆と磯に碎けておし寄せ無限の海氣は彼等の頭上に磅礴せり水天一髪の彼方に髪髻たるものこれなん佐渡の孤島なり伴の丁君が郷土也十二海里の浪の上明日やりの地を踏まん哉あゝ此の景致あり浴者の心地や推して知るべき也此の愉快な

る海水浴に時を移し落日金波を生じて海の彼方に没せんとする頃宿舎に歸りぬ。

夏の思出

一年 平田 晚村

神の子が征矢をひきしはつて切つて放ちし夕立の雨名残なう霽れて、露ちる若葉の韻床しき日の夕なりき。微吟の聲をあはせはのかに匂ふ玉藻の香をかろく袂にはらふ湘南の海に鱗ひしぬ。舟はやう／＼進みて今や江の嶋の翠風を、右に望みつゝ去るなり。煙波渺茫として風光頗る蒼然、扁舟依稀として楫歌ゆるく去來し、遠帆宛ら坐する如く、近帆は將に朦朧夢の如き嶋影に消えなんとす。一分、二分、三分、今やまた／＼大海を呑み了りし十六夜の月は、溢るゝ如き平和の光りを、下界に投げつゝ澄徹水の如き晴空には、星斗点々として銀砂を鏝めたらんやう、淡烟ほのかに立ち置めたる波の上に、やう／＼に落ちゆく死の蔭よりよび醒まされしごとくに見ゆる小仙裏。あゝ優麗の夜よ、典雅の夜よ。舟は今この雪ならぬ銀世界を走るなり。棹は波止の月を碎き、舳は海中の天を穿ち、楳痕一

路金龍銀蛇を走らせつゝ……月は早や高うなりぬ。夜網の篝火、汽船の舷頭など、次第に多く彼方此方に深み出でつゝ何人の風流兒乎、百合咲く岸邊に身を横たへて、銀笛を吹きさすは。あゝ、其の笛の音よ松に響き波に通ひて、泣くが如く訴ふるが如く。……いかに餘韻ある月の夜なるが既にして稻村ヶ崎に着きければこゝにて舟を捨てつ。沙白き濱邊の渚傳ひに、水の如き満天の清光に浴しつゝ歩む。顧みれば舟路は宛も眠れる如く、松籟長しへに夜の賦を謳ふに似たり。舟は既に漕ぎ出でたるらし「高島沖から帆をまき上げて……」と美音を絞る船頭の節のみろ櫓の音に和して細く……遠く……更にまた幽に。

冬の夜

一年 小澤 武

華やかなりし紅葉に飾られたる龍田姫の奥の漸くに見へすなりて唧々たる、蟲聲の耳に入らずなりたる頃は既に之れ自然は冬の季に入りたるなり

一夜熱せる胸の眠られずとて戸を繰つて戸外に立てば孤なる弦月は天心を過ぎて白き

冷光に我が面を輝し竹籬の外自ら明暗の紋様を綴り、南天の葉表前の植込等の或は燦たる冷光を揚げ或はいとも黒う濁りて魔の棲所と恐ろし、池の水面は薄き玻璃に被はれたるに中なる鱗族は如何なすらん下りかゝりたる霜は敷石の上にもうなづかれ白き月光と冷氣を争ふ、四顧は寂として萬籟死し墨繪の如く浮び出でたる冬木立は凋落の悲哀に骸枝徒に瘦せ残んの二葉三葉風無きにカラ／＼と敷きて黒く地上の霜に印せしあと再び沈黙にかへりて木立動かす月行かず萬物悉く凍り付きたる如く思はる

冷氣の身にしむるに思はず身ふるはせて屋内に入れば時計の刻駢の聲の或は消され或は響きて書齋の障子に赤々と灯の点せる宛ら主が歸りを待つもの、如し

短歌

雁來紅の花

加藤ゆかり

うなだれて町を行くなるやせ犬のより
ごころなきわが心かな

雜報

會員消息

○林卓次君は本校助手解職後直ちに静岡縣安倍郡技手に任せられ十一月廿二日出發赴任せられたり

○仲俣伍市君は今回下高井郡林業技手に任



「君に別る、言は比也より汽路にて浦野する」

せらる

○上原上君は本縣在職中の處病氣の爲退職し郷里東筑和田村に歸養せらる

○征矢朴郎君は豊橋聯隊に白井辰雄君は甲府聯隊に何れも一年志願兵として在營せしが今回滿期除隊となり歸郷共に本校を訪問せらる

○關琴義、要尾長一、篠原爲一の三君は何れも一年志願兵として夫々左の聯隊に入營せられたり

水戸工兵第十四大隊第二中隊

關 琴 義 君

豊橋歩兵第六十聯隊第一中隊

西 尾 長 一 君

全 上

篠 原 爲 一 君

謹 告

一、林教諭、安井書記、川崎助手三氏慰勞金募集は十一月を以て打切り同月誌上に掲載の總金額に増呈者の名簿を添へ夫々送達致候に就き左様御承知被下度此段各位に謹告致候

二、購買組合の利金處分法に就ては十二

月十二日の總會に於て協議決定致度希望に有之候處同日は卒業生の出席も無之候儘大体校友會顧問及役員にて左の通り相談相纏め候間左様御承知相成度是は明治四十三年度以降の卒業生諸兄に謹告致置候、申合事項

一、購買組合の利金百參拾貳圓の中五十圓は寄宿舎に寄附し有益なる費用に宛て残り八拾貳圓は校旗及び記念植栽の費用に宛つべき事

安藤前校長慰勞金申込報告

(第二回)

- 金壹圓 (即) 酒井光義君
- 金壹圓 (即) 原田久保作君
- 金貳圓 (即) 中田辰雄君
- 金壹圓 岡田恒治君
- 金壹圓 中島信敏君
- 金壹圓 徳武國久君
- 金壹圓 和田宗吉君
- 金壹圓 關 琴 義君
- 金壹圓 金井澄水君

小計 十圓
累計 貳拾壹圓五拾錢

【注意】安藤先生慰勞金締切は明大正四
年二月末まで延期致し候間右御
承知を乞ふ

謹 告

私儀本年九月以后京都市在住の處今般嶋根縣簸川郡朝山村へ歸省致候此段林友諸君に謹告候也

十二月三日

松 田 力 熊

大正三年十二月廿三日印刷
大正三年十二月廿五日發行

(定價三錢)

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地

編纂兼發行人 安井正夫

長野市南縣町已三番地

印刷者 田中彌助

長野市西后町乙二十一番地

印刷所 長野新聞社活版部

長野縣西筑摩郡福島町二八九番地

發行所 蘆澤書店